部活動経験と対人信頼感の関連とその影響

A63111　加藤 沙織

【背景と目的】

部活動とは共通の趣味・興味を持つ仲間が集まった団体の活動の事である。部活動は、生徒の能力・特性に即し、個性の伸長を目指すという側面が強調されてきたが、同じ趣味・関心を持つ生徒がクラブ集団をつくり、自分たちで活動を計画して、協力して実施するところに、社会性の発達も期待されている。部活動が学校教育において果たしてきた意義や役割は大きく、人格形成にもつながるものであり学校における教育活動としての価値は大きいものと認識されている。

また、青年期は自分や他人に対する否定的な気持ちを乗り越えながら信頼感の確立へと向かう信頼感確立の模索期であると考えられる（天貝，2001）。信頼感の獲得には、青年期の経験が大きく影響しているといえる。

このことから、思春期から青年期の期間に体験する部活動という集団活動は、対人信頼感の発達に影響を及ぼすのではないか、と考えた。

以上をふまえ、本研究は、部活動経験が対人信頼感に与える影響について検討する。

【方法】

１．調査対象・時期

千葉県内の大学に在学中の大学生１～４年生 327 名を対象に 2009 年 11 月 12 日～13 日の期間に、質問用紙を配布した。

２．質問用紙の構成

①対人信頼感尺度（堀井・槌谷，1995）

②部活動経験を尋ねる記述式の質問

③信頼感影響経験測定項目（天貝，1996）

④自由記述　部活動経験のある者のみ「部活動を経験したことによって、対人関係においてよかったこと、何か変化したこと」についての回答を求めた。

⑤フェイスシート

【結果】

信頼感影響経験測定項目の因子分析を行なった結果、「受容経験」因子、と「承認経験」因子、「対人的傷つき経験」因子、「親との親密な関わり経験」因子の４因子が抽出された。

以上の４と因子と「対人信頼感」、部活動の「総合年数」の相関分析を行った結果、「対人信頼感」については「受容経験」「承認経験」「親との親密な関わり経験」「総合年数」との間に正の相関、「対人的傷つき経験」との間に負の相関が見られた。「総合年数」については「対人信頼感」「受容経験」「承認経験」との間に正の相関が見られた。

その後、対人信頼感に対する重回帰分析を行った。「対人信頼感」を従属変数、「総合年数」、「受容経験」、「親との親密な関わり経験」、「対人的傷つき経験」を独立変数として、重回帰分析を行った結果、「対人信頼感」に影響を与えているのは「受容経験」と「対人的傷つき経験」であることがわかった。

相関分析の結果を表１、対人信頼感に対する重回帰分析の結果を表２に示す。

表１　「対人信頼感」、信頼感影響経験測定項目より抽出された４因子、「総合年数」による因子分析の結果

	1	2	3	4	5	6
1.対人信頼感						
2.受容経験	0.31***					
3.承認経験	0.17**	0.53***				
4.親との親密な関わり経験	0.15*	0.36***	0.25***			
5.対人的傷つき経験	-0.30***	-0.00	0.36	0.16**		
6.総合年数	0.17**	0.31***	0.26***	0.01	0.02	

p<.05*　p<.01**　p<.001***

表２　「対人信頼感」に対する重回帰分析の結果

独立変数	標準化偏回帰係数
総合年数	.10
受容経験	.24***
親との親密な関わり経験	.11
対人的傷つき経験	-.32***
R^2=.21	

p<.001***

・自由記述回答

記述の内容から判断し、チームワークや仲間との絆、共に努力した経験について書かれたものを「チームワーク・団結」群、部活動の友人との親密な関わりについて書かれたものを「親友・親密な友人関係」群、社会性の発達に関して書かれたものを「対人スキル」群、人との出会いや友人関係の広がりについて書かれたものを「友人関係の広がり」群、精神面の成長などについて書かれたものを「精神的・人間的成長」群、傷ついた経験やマイナスなイメージについて書かれた「マイナスイメージ」群としてまとめた。

【考察】

対人信頼感に対する重回帰分析では、部活動の総合年数との間には有意な影響がみられなかったことから、部活動経験の長さは対人信頼感に直接的な影響を与えていないと考えられる。対人信頼感に対する重回帰分析の結果、受容経験は正の影響、対人的傷つき経験は負の影響であったことから、人から認められ、受け入れてもらった経験が多く、対人的な関わりで傷ついた経験の少ない者が対人信頼感が高くなると考えられる。

総合年数と受容経験、総合年数と承認経験で相関が見られたことから、部活動に所属することで受容経験、承認経験が多くなることが考えられる。これは、『本音で話したりしたので』や『自分をよく理解してくれる人ができた』『ありのままにじぶんを認めてもらえてうれしかった』などの「受容経験」に関係する自由記述回答、『みんなで協力して何かをやり遂げること、その際に生じるチームワークを学べた』『仲間と協力することの大切さを学ぶことができた』などの、「承認経験」の項目につながる自由記述回答からも推測される。

また、総合年数は対人信頼感とも相関が見られた。天貝（1996）は、受容経験と承認経験は対人信頼感に影響を与えていることが明らかにしている。このことから、部活動に所属し受容経験、承認経験が増えることで、対人信頼感が高くなるのではないかと考えられる。しかし、先でも述べたように、対人信頼感に対する重回帰分析では、部活動の総合年数との間には影響がみられなかった。部活動に所属し、受容経験、承認経験が増えるということは先にも述べているが、自由記述のマイナスイメージ群の記述から、部活動に所属して傷ついた経験や、人が嫌になったという対人的傷つき経験が起こっている事がわかる。共通の趣味・関心を持つ集団の中であっても、部活動はさまざまな他者の集団である。気の合う仲間がいて、長く一緒にいることで認めてもらったり受け入れてもらえることもあれば、なかなか相手を理解できず、うまくいかなくて喧嘩してしまったり、お互いに受け入れられず、対人関係において傷つくことがあるのも事実である。このように、部活動に長く所属しているだけでは対人信頼感が高くなることはないと考えられる。

しかし、『部活仲間以上に信頼関係を作れたことがない』『初めて信頼できる仲間が出来た』『本当に好きになれる友達ができた』などの記述は多く、そこに長く所属し共に生活していくことで、部内の友人など特定の他者間での信頼関係を深めることには部活動経験は有効であることが考えられる。

長く部活動を経験することよりも、クラスや部活、グループなどの集団の中で、どのような人間関係を築くかが対人信頼感の発達に影響を与えていると考えられる。

【参考文献】

天貝由美子　2001　「信頼感の発達心理学―思春期から老年期に至るまで」　新曜社
吉本次郎・小林一也　1979　現代学校教育全集第 10 巻「クラブ・部活動」　株式会社ぎょうせい
酒井厚　2005　「対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ―重要な他者間で信頼すること、されること」　川島書店
堀井俊章　1992　対人信頼感尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究　上智大学大学院文学部研究科